



ナシさび色胴枯病菌によるナシ果実腐敗症状の発生

—チャバネアオカメムシの加害部からの感染—

山口県農林総合技術センター ^{からつ}唐津 ^{たつひこ}達彦*・^{とのこうち}殿河内 ^{ひさこ}寿子**

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
農業環境研究部門

^{ほり}堀 ^た田 ^{みつ}光 ^お生

はじめに

山口県下関市は果樹栽培の盛んな地域で、県内最大のナシ産地を擁している。2014年8月、市内の赤ナシ無袋栽培園において、果実が樹上に着果したまま激しく腐敗する症状が発生した。本症状の発生は、果樹カメムシ類の一種チャバネアオカメムシの大量寄生が認められた園地に限られていた。

筆者らは本症状へのチャバネアオカメムシの関与を推測し、室内で再現試験を行った結果、本症状はチャバネアオカメムシの加害部から病原細菌が感染することによって発生したことが示唆された。

このことについては、既に本誌（殿河内・唐津，2015）で紹介しているが、その後、病原細菌について詳細に調査した結果、ナシさび色胴枯病菌 *Erwinia chrysanthemi*（現 *Dickeya* 属）であることが明らかになった（唐津ら，2021）。

ナシさび色胴枯病は、枝と幹の表皮の一部から滲み出した樹液様物質が乾固して鉄さび色になる症状が発生する病害である（梅本・長井，1984；陶山ら，1987）。本病により枝と幹が枯死するものの、果実が腐敗するという報告はない。また、果樹カメムシ類によるナシの被害は、加害部の陥没（変形果）や果肉がスポンジ状に変質する等で、果実が腐敗するとの報告はない（長谷川・梅谷，1974）。したがって、本症状はナシさび色胴枯病菌とチャバネアオカメムシの両者が存在して初めて発生する病害と考えられる。

これらの点について、病原細菌の同定試験に関する知見を加えて改めて紹介する。

Occurrence of Bacterial Fruit Rot of Japanese Pear Caused by *Erwinia chrysanthemi*. By Tatsuhiko KARATSU, Hisako TONOGOUCHI and Mitsuo HORITA

（キーワード：ナシ、さび色胴枯病菌、チャバネアオカメムシ、果実腐敗）

*現所属：山口県山口農林水産事務所

**現所属：山口県周南農林水産事務所

I 発生状況と病徴

2014年8月19日に、ナシ農園の一部の園地 50 a において、チャバネアオカメムシ（図-1）の大量寄生とともに本症状の初発生が生産者により確認された。その後、本症状が急増し、8月28日には‘豊水’と‘新興’の果実の大半が腐敗した（図-2）。果実に症状が認められてから甚大な被害が生じるまでに9日間しか要しておらず、極



図-1 チャバネアオカメムシ成虫



図-2 ナシ‘豊水’に発生した果実腐敗症状
撮影：2014年9月1日，原図：原田 直。